

安七五期

葉書きの同級会

佐久間惣一 十月二七日突然の死去。山形自動車道笹谷トネル内での交通事故であった。数年前の脳梗塞で右半身不自由の影響あったのでは無いだろうか。翌朝伊藤哲雄の連絡であたふたと駆けつけ、私はまずは整理された住所リストに従い知人への死去連絡を手伝うはめになった。後で妻秀子から聞いて知った事だが、退職の通知を出す住所リストが死亡連絡に成ってしまったのだ。葬儀は彼の退職予定の十月三十日だった。葬祭場は約三百人が着座し、新沢昌英、信稜会

(福大経済同窓)会長、小中高の友人宗形敏雄 七五期 会阿部栄夫などが弔辞。私は彼と飲み友達であったKF B専務瀨川賢一にも弔辞を依頼。瀨川は二つ返事で引受けた。曰く「君と初めて会ったのはあるスナックであった。そして、最後に会ったのも同じ場所」と。秀子は何度か宮城県警に呼び出された。そして惣一がお土産に山形から買ってきた富貴豆も一月後に貰って涙した。十一月末には息子の嫁が個展を開催、いくぶん悲しみを和らげた。彼女に一番必要なのは「時間薬」である。佐久間宗之 桑野

会会長の小間使いである私は「人口で応援に来る桑野会会員に入場券を配布せよ」との命令で十二月二八日風邪をおして花園ラグビー場へ行った。幸いその任を関西桑野会の会員が引受けて下さり、私は応援団の一人となった。試合の相手は二回出場の大冢八幡。前半PGが決まれば。後半のPGが決まれば。その後トライ揚げたが既に遅し。トキでノーサイド。しかし私には密かなる不純な目的があった。かねて応援団OBの鈴木和幸からいよいよBの鈴木和幸からいよいよ応援団長も今年から女生徒だと聞いていたからである。前記の通り試合は観戦したよ。しかし、私の視線はしっかりと応援団に釘付け。羽織袴の団長ばかりでなく、学生服の団員も女生徒(男子も居たが)である。彼ら

は寒空の中、声をからし、汗し裸足で走り回り、テキパキと指示を出し350人の応援団を統率し、鼓舞する。小柄な団長は声も大きく雄々しい。安積の伝統そのものである。まいたあ。おんちゃんも4万円の交通費掛けて君達を見に来た甲斐があったよ。涙を流しながら、校歌を歌った。紫の旗を歌った。鼻風邪のふりして何度も涙をかんだ。『弥重先生、莊平さん！安積は共学に成っても立派な安積高応援団だよ』私はわざわざ大阪くんたりまで来て01年の甲子園で最後の男子校を確認し、05年の花園でやっと共学校を納得した。四年かけ立派な共学校に育てた廣瀬渉校長等に心底感謝